

No. 378【2019年10月18日配信】

館内展示「災害の記憶を忘れない―地震・豪雪・台風」展示図書のご紹介(担当:鈴木)

こんにちは！嘱託員の鈴木です。

先週末に東日本を襲った台風19号について、各地の状況が明らかになるにつれ、その被害の大きさに驚き、自然災害の脅威を感じました。折しも歴史資料室では休館明けの15日から「災害の記憶を忘れない―地震・豪雪・台風」の展示を始めるタイミングだったため、余計に胸の痛む思いがしました。

台風が太平洋に抜けた10月13日(日)、私は岩手県釜石市に向かいました。内陸部は川が増水し木の葉が散乱していましたが快晴で、それほど被害を感じなかったのですが、釜石市に入る道路は海岸沿いの国道45号が山肌から流れ出る大量の水と土砂崩れで通行止めになり、釜石道・三陸道も不通、唯一通行できたのは遠野に抜ける国道283号だけでした。鉄道も運休、市内に入る手段は自動車だけになっていました。

翻って青森市を考えてみますと、背後には八甲田が控え、前面は海。災害が起った場合、避難や物資供給の経路は限られています。また、八甲田に大量の雨が降った場合、その水は市街地を流れる河川に集中し洪水を引き起こす危険があります。

今回、被災地の人々が一様に口にしたのは「何十年もここに住んでいるがこんなことは初めてだ」という言葉です。これまで大丈夫だったからと油断せず、災害に備えることが大切です。

そこで今回は、8階で展示した図書の中から3冊、ご紹介したいと思います。

まずは、ゆうゆう編集部編『何が起きても命を守る 防災 減災 BOOK』(主婦の友社 2016年)。これは、災害から自分、家族、ペットの命を守るために普段からどう備えるべきか、身近なことから始めるための本です。

2冊目は、命を守る水害読本編集委員会『命を守る水害読本』(毎日新聞社 2017年)。水害からどう身を守るべきか、各地で発生した水害の実情や、気象の基礎知識、豪雨への備え、避難の方法を、図を使って具体的に示し、また水害を経験した自治体の例や防災への取り組み、水害をテーマにした幸田真音の小説『大暴落 ガラ』(中央公論新社 2017年)も紹介されています。

最後に、弓木春菜『気象災害から身を守る大切なことわざ』(河出書房新社 2017年)。NHK気象キャスターの著者が、「津波てんでんこ」のような各地に伝わる身を守るための言葉を全国から収集した本です。気象の変化の予兆を知らせる「蛇抜け(じゃぬけ、山崩れ・土石流)の前には、きな臭い匂いがする」(長野県南木曽町)、「山の生き物が里に下りたら火山爆発の兆候」(山梨県富士河口湖町)、「口笛も吹くな、あわ(表層雪崩)が来るぞ」(岐阜県飛騨市)等々、各地に伝わることわざに先人たちの知恵が生きています。

館内には、このほかにも災害・災害救助(分類番号369.3)や気象学(分類番号451)に関する図書が多数ありますので、この機会に身近な防災について考えてみてはいかがでしょうか。

【あおもり歴史トリビアNo.373 歴史クイズの答】()内は答に関するトリビアのNo.

1、蕨餅 (No.335)

2、③植物 (No.311)

3、森林博物館 (旧青森大林区署) (No.223)



青森大林区署

4、ヘレン・ケラー (No.262)

5、①水 (No.274)



日本一おいしい水のモニュメント

6、太宰治 (No.277)